

あまいと 結ぶ

増刊号（2018年12月1日）

発行：四国手話通訳問題研究会（四通研）

四国手話学習会「手話でGO！2018」開催

11月18日（日）、愛媛県視聴覚福祉センターで四国手話学習会「手話でGO！2018」を開催しました。

この学習会は、四国在住の人が一堂に会し、①手話を獲得する、②手話で学ぶ、③手話を学ぶ、④手話を使う、⑤手話を守るという言葉としての5つの権利を守るという理念に基づき、手話や聴覚障がい者及びすべての人の権利について共に学ぶことを目的に、四国ろうあ連盟（四ろう連）と四国手話通訳問題研究会（四通研）の合同行事として年1回、四国4県持ち回りで開催しています。今年は97名が参加しました。

午前中は講師を招いての講演会を、午後は分科会での学習の二部構成となっています。今年の講演はろうLGBT支援団体「Deaf LGBT Center」代表の山本芙由美氏を招きました。また、分科会では、新たに第5分科会「次世代のつどい」を開催し、NGS(Next Generation Shikoku)及び四ろう連青年部の仲間が集う新しい試みも行いました。

今回の増刊号は、この「手話でGO！」の報告となります。参加した方も、参加できなかった方もどうぞ一読いただき、学習会の雰囲気を感じてください。

来年度は11月19日（日）、高知県で開催予定です。皆様の参加をお待ちしております。

講演会「ろうLGBTを知ろう」

講師：ろうLGBT支援団体「Deaf LGBT Center」代表 山本 芙由美氏



今年の記念講演は、「性の多様性を知り手話表現を知ろう」というテーマで、Deaf LGBT Center代表の山本芙由美さんとパートナーの山本諒さん、お二人のお話を聞くことができました。性の話というとどちらかというと消極的になりがちですが、今回、手話表現も合わせて、性的指向にはそれぞれの立場があること“LGBTQ”を学びました。

私たちが活動している手話や障がい者問題でも、「何が問題？」「何が障害？」なのかは、それについてよく聞く・知ることが始まりです。私たちの仲間にも性に違和感を持っている人や多様な性的指向の人たちが居ることを知り、一緒に学んで行くことが大切だと改めて感じました。

第1分科会「手話で話そう」

(担当：徳島)

第1分科会は、8名と少ない参加者でしたが、始まるとさらに人数が減り、ろう者2名、健聴4名と少なくなりましたが、楽しく学ぶことができましたと思います。最初に、人間の「喜怒哀楽」の顔の表情をみんなで表現をしました。普段鏡を見ないので喜怒哀楽の表情については意識しないと難しいものですが、手話を学んでいるだけあって豊かな表情をして下さる参加者ばかり。口話での口パクを読み取る。「飲む」という動きで何から飲んでいるのか。指さして今はどの位置を指しているのかを当てたり、「さようなら」「おいで」の表現を使い、表情や強さ、速さで伝えあうことや最後には身振りで物語のタイトルを伝えあいました。

少ない人数でしたが、参加したろう者の意外な表現にみんなで笑い合ったりと和気あいあいとした分科会になりました。



第2分科会「手話を創ろう」

(担当：高知)

徳島1名、愛媛10名、高知3名の計14名の参加がありました。

標準手話確定普及研究部四国班が毎年進行を担当しています。四国班の活動報告と四国の手話「あさいと」出版後の課題や、今後の取り組みについて発表しました。そして恒例の「あさいと杯」今年も新しい手話をみんなで考えます。どうすればわかりやすい手話になるのか、意味を正確につたえるための工夫など、悩みつつ時には爆笑しながら、意見を出し合いました。新しい手話をうみだすためには、音声言語と手話言語両方の知識が必要となります。また古くから地域で使われていた手話の掘り起こしも大切になります。この分科会が「手話この魅力あることば」を再発見するとともに、新しい手話の創造や表現の工夫を見出すきっかけになればうれしいかぎりです。



第3分科会「手話を学ぼう」

(担当：愛媛)

第三分科会は27名（ろう者14名、健聴13名）で大変盛り上がりしました。

最初は慣用語の表現です。例えば「口をそえる」など鼻とか口を使った慣用語をグループに分かれて話し合い、発表をしてもらいました。意味を掴んだ表現や、表情一つで終わってしまうものなど、色々な表現がありました。次に例文を出し、例えば「彼は野球が一枚上手」では、漢字の「上手」は「うわて」と読みますが、他の読み方（じょうず・かみて）も発表してもらいます。その後、例文で意味を掴み、自分よりも上という表情も含め表現をしてもらいました。最後はゲームをしました。たとえば金星は「きんぼし」「きんせい」と読み方があります。5人に一斉に表現してもらい表現が少ないほうが勝ちで飽きをあげました。あっという間の楽しい2時間でした。



第4分科会「手話で学ぼう」

知ってるつもり！？

ヘレンケラーとサリバン先生の真実

(担当：香川)

みんなが知っているヘレンケラーとサリバン先生を取り上げ、みんなが知らなかった真実を手話で学びました。

映画「奇跡の人」では二人が出会い聞こえない、見えない、話せないヘレンケラーがサリバン先生とともに悩み、苦しみ、物には名前があることがわかるようになるまでのお話です。今回は二人の生立ちから出会い、その後の生活について紹介しました。実は電話を発明したベル博士が二人を引き合わせ、ヘレンの障害者への支援活動のきっかけになったのもベル博士でした。最後に「奇跡の人」は誰なのか？ヘレンケラーなのか、サリバン先生なのか、私たちも困難に立ち向かうことで「奇跡の人」になれるのでは・・・で締めくくりました。



第5分科会「次世代のつどい」

(担当：四通研組織部及び四ろう連青年部)

第5分科会は「次世代のつどい」をテーマに、ろう者6人、健聴6人の計12人の若い人からベテランまで楽しい有意義な分科会になりました。

まず、お互いの組織を知ろうという事で、ろう者の全日本ろうあ連盟と健聴者の全国手話通訳問題研究会のそれぞれの団体について確認をしました。全日ろう連の青年部は歴史があり体制が整っており、先輩から受け継いでいるものが多いように感じました。全通研のN-Actionはまだ活動を始めたばかりで、これからは双方がお互いに両輪のごとく協力が必要だと感じました。また、各県の次世代への取り組みなどの情報交換や、協会や通研に入会したきっかけなどフリートークで盛り上がりました。また、ベテラン会員などの会員を続けている理由など先輩方の意見を聞き、今後もこのテーマでの分科会で意見交換できればという参加者からの声も聴かれました。

